

2025 年 6 月校長メッセージ「現代社会における覇道と王道」

両国高校では、高校 2 年生になると「古典探究」の授業があり、より高度な内容の古文と漢文を学習します。「古典探究」の教科書の漢文編には、司馬遷の「史記」や漢詩、白居易の「長恨歌」、古代中国の思想家たちである諸子百家が取り上げられ、その中には「孟子」が含まれています。

孟子は紀元前 372 年に中国山東省の鄒(すう)に生まれ、古代中国戦国時代の君主たちに「仁義」に基づく王道政治を説いた思想家で、孔子に次ぐ儒家の重要な位置にいて、「仁義」だけでなく性善説、易姓革命を肯定する考え方を唱えた人として知られます。多くの「古典探究」の教科書では孟子の性善説に関する本文が採用され、両国だけでなく全国の高校生が「人間の本性は善」とする孟子の考えに触れる経験をもちます。

その孟子の、政治は王道をもって行わなければならないという思想を端的に表現した文章が『孟子公孫丑章句上』にあります。

「孟子曰く、人皆人に忍びざるの心有り。先王人に忍びざるの心有りて、斯（すなわち）人に忍びざるの政（まつりごと）有りき。人に忍びざるの心を以て、人に忍びざるの政を行なわば、天下を治ること、之を掌（たなごころ）の上に運（めぐ）らす〔がごとくなる〕べし。」（『孟子（上）岩波文庫』より引用、以下の本文も同様）

また、この文章に先立って次のような文章も「孟子」にはあります。

「孟子曰く、力を以て仁を仮（か）る者は覇たり。覇は必ず大国を有（たも）つ〔を要す〕。徳を以て仁を行なう者は王たり。王は大を待たず、湯（とう）は七十里を以てし、文王は百里を以てせり。力を以て人を服する者は心服せしむるに非ざるなり。力足らざればなり。徳を以て人に服せしむる者は、中心より悦びて誠に服せしむるなり、七十子の孔子に服せるがごとし。詩に西よりし東よりし、南よりし北よりし、服せざる無しと云えるは、此れこの謂（いい）なり。」

先の引用の「忍びざるの心」とは「人の苦しみを見過ごせない憐みや慈悲の心」のことで、人にはこのような「良い心」があるという考え方は、「人間の本性は善」とする孟子の思想の根幹といえることができるでしょう。こうした「良い心」で慈悲の政治を行えば、世の中はたやすく治めることができると孟子は言っています。引用文にある「先王」とは、伝説上の聖王である堯（ぎょう）舜（しゅん）のことで、後の引用にある湯は、これらの伝説の聖王につらなる殷の初代王で徳の高い王のことです。

後の引用では、「忍びざるの心」と相通じる「仁」、すなわち人を哀れみ同情する心が十分ではないにも関わらず、力で慈悲があるかのように見せかける者が覇であると孟子は断言します。「忍びざるの心」や「仁」は人の善なる心のあり様を示していますが、そうした善なる心が不十分なところを権力や暴力、軍事力や強制力の強さで補

う、あるいは強引に従わせて支配することが覇であるということです。したがって、そうした強い力、支配力をもつために大国が必要だと孟子はいいます。人徳をもって慈悲の政治を行うのであれば、大国である必要はなく小さな国で十分だと孟子はいいます。

孟子の生きた古代中国の戦国時代において、孟子の主張するような人徳をもって行う慈悲の政治が実際に行われたかという点、そのような理想的な国は出現しませんでした。「孟子」本文には、孟子と戦国時代の君主たち、例えば斉の宣王や梁の恵王とのやり取りが出てきますが、これらの君主は孟子の理想主義に心服するようなそぶりを見せますが、実際の政治行動として王道政治を行うことはなく、王道はいくつもの大国が生き残りをかけて争っている戦国時代において現実的な政治統制システムではありませんでした。戦国時代に先立つ春秋時代には多くの小国が存在していました。これら小国同士の戦いによって、生き残った少数の大国同士の争う時代が戦国時代で、力による支配を正当化する強力な軍事力を有する大国が生き残っていき、さらに生き残った国の中でも厳しく人々を統制する国が強大になっていきました。最終的には法による人民を統制する政治システムをつくり上げ、強大な軍事力をもった秦が他の国々を滅ぼして統一王朝を打ち立てました。秦は仁義を重んじる儒家の理想主義を嫌い、焚書坑儒を行ったため、孟子の生涯の記録も失われることになったと考えられています。古代中国に統一国家が出現したことは、覇道が王道よりも戦国時代をまとめるのにより有効であることを証明したといつてもよいかもしれません。秦王の政は始皇帝となり、全ての権力を掌中におさめました。覇道の終着点は皇帝への権力の集中でした。

アジアやヨーロッパのさまざまな国々において歴史の中で、人間の本性を善とする王道の考えによって、慈悲の政治が国の統治システムとして成功した例を見つけることは、なかなか困難なことです。支配する人々を統制し、強い軍事力を有する政治勢力が大きな力をもつ国をつくることができました。かろうじて近代社会が成立した以降に誕生した民主主義と呼ばれる政治システムだけが、主権をもつ人々の良心を前提とした統治のやり方として機能していると思われます。民主主義と呼ばれる政治システムでは、政治的リーダーは、人々から選ばれて指導的な役割に就き、リーダーシップを発揮することになります。多くの人々から支持を受けられるような国民全体に幸福をもたらしてくれるだろう「良い心」をもっていること、そして倫理的、道徳的に高い価値観に基づいて政治を行うことができることが、その立場に選ばれる前提となるからです。

しかし、こうした民主主義と呼ばれる政治システムは、現代において「専制的政治」に置き換わりつつあります。AIで検索すると、情報ソースによって数の違いがありますが、2005年に45か国だった専制的政治体制の国は2021年の時点で56か国に増加しています。人権や政治参加に制限を加え、力による政治を行うのが専制的政治であるので、このことはいわゆる覇道の考え方による政治であると断言できます。古

代中国と同様に現代社会でも覇道が幅を利かせるようになってきているといっているといいいでしょう。

現代においてなぜ覇道が求められるようになってきたのでしょうか。その理由として、自分の安全や生存、幸せな生活の継続のためには、国が強い力をもっている必要性があると多くの人が考えるようになってきているからだと思います。私たちの幸せな生活を脅かすものとして、気候変動に代表される地球における人間の生存環境の変化、災害等の自然の脅威などが考えられますが、現在特に世界の人々が気にかけていることは、軍事的に大きな脅威となる国々の出現し、戦争への危機感があることだと考えます。こうした脅威から私たちを守ってくれるのは、人徳による慈悲の心に基づいた政治ではなく、軍事力を含めて強力な力によって運営される政治体制であり、それを望むように人々の考えが変化していかざるを得ない現状があると思います。

日本国内に目を転じてみても、私たちは安全、安心を維持していくための努力をし続けなければならない負担が増加してきていると感じています。大きな地震などこれまで起きなかった大きな自然災害への備えはもちろんのこと、日本社会では考えられなかった私たちの生活を脅かす犯罪、例えば強盗や詐欺のような事件が頻繁に発生するようになりました。私たちの生活のすぐそばに、自己の利益のためには何でもありという風潮、お年寄りをだまして金を巻き上げたり、強盗や窃盗を平然と行ったりする者たちが出現し、無関係な人を殺傷して、「誰でもよいから殺したかった」とうそぶく者まで出てくるようになりました。道徳心や公德心と呼ばれる私たちの社会を支えていた基本的な考え方が崩れつつあると感じている人は確実に増えています。そして、多くの国民は政治権力が強い力をもって私たちの生活を守ってくれることを強く望み、犯罪者には大きな罰則を課すことを望むようになってきています。日本も、人々の考え方は次第に覇道に傾きつつあるように感じます。

王道が成立するためには、統治を担う政治的リーダーだけが人徳や慈悲の心をもてばよいではありません。私たち一般の人々が高い道徳性や倫理観をもち、慈悲の心をもっている必要があります。政治の指導者を選ぶ主権者である国民が、自分たちの国の将来を真剣に考え、最良の人を政治的なリーダーに選ぶことができることで、民主主義は成り立っています。我が国において、安全な暮らしが普通に当たり前のこととして成立していたのは、一般の多くの人たちの誰もが道徳性と倫理観に基づいた行動ができていた、そしてそのことが可能であったのは、日本で高い教育水準が保たれていたことや、比較的均一で共通の文化的な背景があったこと、地域社会の人間関係が良好であったことなどの理由にあげられます。

孟子は戦国時代の国々の君主に王道政治を説いて回りましたが、結果としてどの国からも受け入れられることはありませんでした。現代においても、孟子と同じ高い理想をもつ人がいると仮定して、この人が現在の大きな軍事力をもった国々を遊説して歩いて、その考えが指導者に受け入れられるかと考えても、戦国時代と同じように理

想主義を受け入れることはないでしょう。指導者が個人の心情として理想主義に同意することができたとしても、複雑で絡み合った利害関係の微妙なバランスの上に権力が成り立っている以上、理想主義に応じることは不可能だからです。

そうしてみると、心の中で世界は王道であるべきと思いながらも、現実には覇道の世の中を認めざるを得ないというのが、私たちの置かれている状況ということができるのかもしれませんが。

新しい1万円札の肖像となった日本経済の最も重要な開拓者である渋沢栄一に、「論語と算盤」という著作があり、その中に「ただ王道あるのみ」という文章があります。「法の制定はもとよりよいが、法が制定されているからといって、一も二もなくそれに裁断を仰ぐといふことは、なるべくせぬようにしたい、もしそれ富豪も貧民も王道をもって立ち、王道はすなわち人間行為の定規であるといふ考えをもって世に処すならば、百の法文、千の規則あるよりもはるかに勝ったことと思う。」(『論語と算盤』角川ソフィア文庫)とあり、資本家と労働者の関係性について言及している部分ですが、渋沢が言いたいことは、どのような立場であっても、相手に対しての思いやりや慈悲の心をもつことが、世の中を円滑に進めることができる、進歩や前進につながるということではなかったのかと思います。

覇道の考えによる政治の終着点は権力の集中と先述しました。このことは同時に、権力の集中は権力者を打ち倒せば、容易に権力の争奪が可能であるということの意味します。4月の校長メッセージで紹介した『NEXUS 情報の人類史』ではAIによる権力奪取の可能性について論じていますが、権力の集中度が高まるほど、すなわち独裁であるほど権力の奪取がたやすいことを、ユヴァル・ノア・ハラリ氏はローマ帝国皇帝のティベリウスを例にあげて説明しています。集中した権力は打ち倒される危険が常にあることを、世界の専制政治の指導者はよく分かっていて、自身の立場と力を守るために、より強大な力をもとうとする悪循環に陥るということもできそうです。

世界が様々な解決の困難な課題を抱え、紛争や戦争が途絶えることがない中で、秩序を保っていくための現実的な政治の在り方である覇道は、政治的リーダーには当たり前の選択なのかもしれません。しかし、力による支配、グローバル化とダイバシティの否定によって生じる数多くの悲劇と不幸を、私たちは知性によって予測しなければなりません。さまざまな困難を抱える現実社会の中であっても、どれだけ王道の占める部分を増やすことができるかが、私たちがより人間らしく生きることと関わってくるように感じます。

リンク

2025年4月校長メッセージ 「『NEXUS 情報の人類史』を読んで考えたこと」

2025年5月校長メッセージ 「おいしいラッシーの作り方」